

○研究の概要（富岡市立南中学校の取組）

1 学校教育全体で行う道徳教育の推進

- 本校生徒の実態から、一層伸ばしたい道徳性として、「向上心・個性の伸長」「思いやり・感謝」「よりよい学校生活・集団生活の充実」「生命の尊さ」を重点内容項目とし、全体計画の中に位置付けて実施した。
- 道徳の年間指導計画を、教科等学校教育活動全体との関連を図りながら見直すとともに、道徳教育全体計画の別業を作成し、これを活用して「補充」「深化」「統合」のいずれかに位置付けた道徳の指導案のもと授業を行った。
- 授業で学習した内容を日常生活の中で振り返り、日常的な自覚につながるように、各学年の道徳の授業で行った内容や生徒の感想等をまとめたものを廊下壁面に掲示した。また、授業で使った読み物等の教材と生徒の書いたワークシートを1つのファイルに保管し、授業と関連する学校行事等の前後で生徒が書いた感想等も同じファイルに綴じておくことで、生徒の心の成長が見取れるようにした。

2 授業改善（思いや考えを伝え合う指導方法の工夫）

- 要請訪問や講師を招いた月1回程度の公開授業及び全職員による研究授業において、指導案の形式を統一し指導観（価値観・生徒観・教材観）を明確にした授業を行った。
- 「ねらい」→「中心発問」→「中心発問に導く発問」の順に授業を構想し、価値を焦点化して、教材の内容に沿った価値の追求を通して理解を深めることを共通理解した上で実践に臨むこととした。
- 中心となる授業の形態が「教師の発問→生徒の発言」の繰り返しから、「生徒の発言→生徒の発言」へとなるよう工夫し、生徒相互の伝え合う場への移行に努めた。
- 授業の中で生徒が互いの思いや考えを伝え合うための手立てとして、学級全体、グループ・ペアでの伝え合い、カード等による意思表示の視覚化、座席の形態等の様々な工夫を指導案に明示して、授業を行った。
- 研究授業と研究会で話し合われた改善点等を「研修だより」にまとめて全員で共有化を図り、以後の道徳授業に生かすことで授業の質的向上を図った。

3 家庭との連携

- 本校独自に毎月19日を家庭における「道徳の日」と定め、その日に合わせて道徳通信「Myハート通信」を発行した。その中で、日々の実践を紹介するとともに、毎月テーマを決めてそれに関する資料を「私たちの道徳」等から選んで提供し、親子で話題にする機会を設定することで、道徳的意識の向上を図った。
- 学校と家庭が連携して道徳教育を推進していく道標を共有化するために、本校の道徳教育の重点項目を中心にまとめた啓発リーフレットを家庭や地域に配布した。
- 学校の道徳教育への理解を深めてもらうために、保護者対象の道徳教育に関するアンケートを年2回実施し、その結果を家庭と連携した指導を行うための資料とした。

4 研究の成果

- 研究授業において、指導観を中心に指導案の統一を図り、全職員の共通理解のもと、道徳の授業を行ったことで、教師の授業構想力、伝え合う活動の工夫等の質的な向上が見られた。その結果、生徒が道徳の授業に主体的、協働的に取り組むようになった。
- 2年間を通じて特別講師を招いての基礎研修と授業研究会の積み重ねにより、教師に道徳授業における基本的な考え方や手法が身に付き、道徳の授業に自信をもって向き合うことができるようになった。また、指導主事による要請訪問を複数回行い、国や県の動向に沿った指導方法の研修が充実し、授業改善に結び付いた。
- 「伝え合う活動」の約束を簡潔にまとめた掲示物を作成し、全教室に掲示して、「伝え合う活動」を道徳の時間だけでなく、教科等の指導においても取り入れるようにした。その結果、生徒の発言への抵抗感が薄れ、自分の思いを少しずつ他人に伝えられる場面が増えてきた。
- 道徳ファイルを活用したり、授業で扱った内容を廊下に掲示して共有したりしたことで、生徒は学習したことを日常的に繰り返し振り返ることができ、道徳的価値への関心の高まりや自覚が感じられるようになった。これらのことにより、よりよい生き方を追求する姿勢にも向上が見られた。

○富岡市立南中学校の研究内容

1 学校の概要

学校名	所在地	電話番号	生徒数
とみおかしりつみなみちゅうがっこう 富岡市立南中学校	富岡市中高瀬1118番地	0274-64-1603	357人

- 2 研究主題 多様な価値観を尊重し、よりよい生き方を追求する生徒の育成
—思いや考えを伝え合う指導方法の工夫—

3 研究主題の設定理由

本校は、市の中央を東西に流れる鏑川の南に位置し、周囲は田園に囲まれ自然が豊かで、学習環境に恵まれた地域にある。「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力をもち、心豊かでたくましい生徒の育成」の学校教育目標のもと、日々の教育に当たっている。また、本校では、道徳教育と関連付け、平成10年度から自問教育に取り組んでいる。現在は、「朝読書」「ノーチャイム・ノー号令」「自問清掃」を自問活動の柱とし、生徒会活動と連携して「我慢の心・思いやりの心・気付きの心・感謝の心・正直な心」の五心を醸成している。

本校の生徒は、明るく素直な生徒が多く、生徒会を中心として「日本一の学校南中」を合言葉に学校生活に意欲的に取り組んでいる。一方で、自分の意志や考えを他者に積極的に伝えることが苦手な生徒や、困難な課題に対し自ら解決策を考え克服しようとする強い意志が身に付いていない生徒もいる。また、生徒同士の人間関係については、全体的に良好といえるが、些細なことが原因でトラブルに発展することがあるのも事実である。これは相手の考えや個性を受け入れたり、話し合いによりお互いを理解し合ったりして、うまく折り合いをつけて解決することが苦手なことが原因として考えられる。生徒の人間関係づくりと豊かな人間性の育成は、本校の課題の一つである。

また、道徳性検査の結果から見ると、本校の生徒はほとんどの項目で全国平均並みかそれを上回っており、全体として望ましい傾向にある。その中で評価の割合が比較的低かった項目として、「節度」「向上心」「自然愛、畏敬の念」「個性伸長」が挙げられる。これらの結果を参考にして、各学年ごとに課題を明確にし日々の教育活動に当たること、より一層の道徳性の向上が期待できる。

このような実態から、生徒が自他のよさを互いに認め合い、よりよい人間関係を築く能力を身に付けることが、これからの自分の人生を切り開き、よりよい人生を歩んでいくために欠かせないことである。そこで、平成27・28年度文部科学省委託事業の道徳教育の研究指定校を受けたことで、学校全体で道徳教育を進めていながら、特に道徳の時間の授業改善を中心に研究に取り組もうと考えた。その中で、教材の選択や発問の工夫に加えて、互いの思いや考えを伝え合う指導方法を改善し、充実させていくことにより、生徒の道徳性を養うことができると考え、本主題を設定した。

4 研究の概要

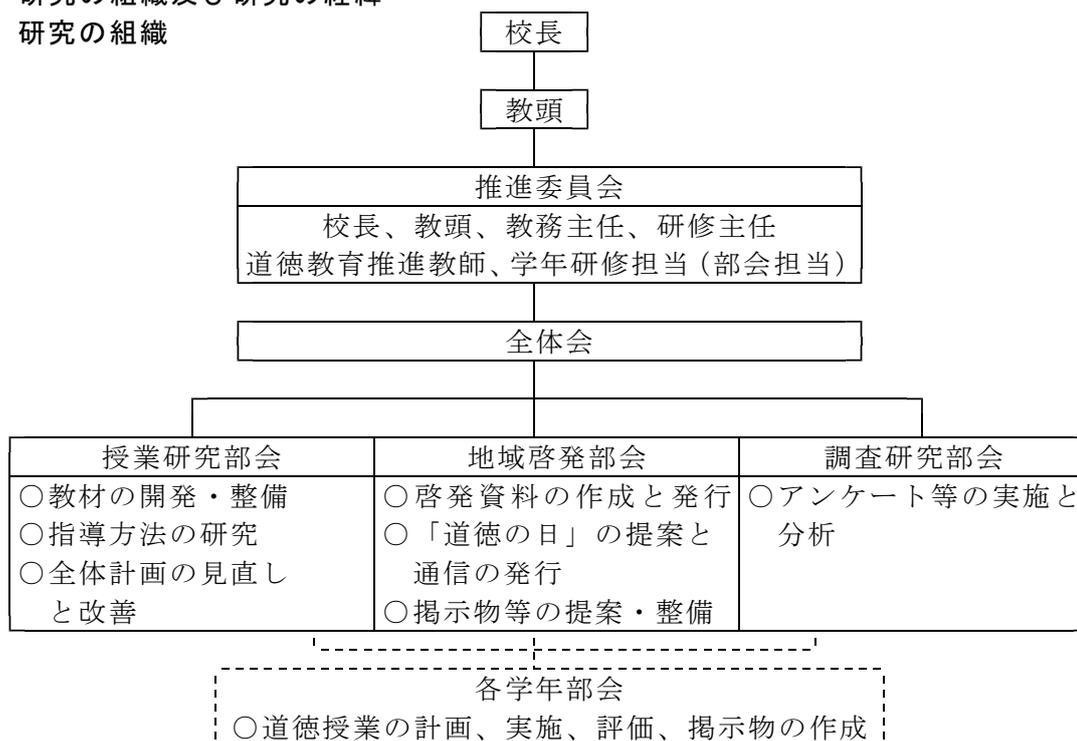
(1) 研究のねらい

生徒の実態や発達の段階を踏まえ、互いのよさを認め合い、よりよい生き方についての自覚を促すため、道徳教育諸計画の改善を図るとともに、特に道徳の時間における資料提示の仕方や発問構成を工夫し、生徒が互いの思いや考えを伝え合う中で、思考を深め、価値を自覚できるよう指導の改善を図る。



(2) 研究の組織及び研究の経緯

① 研究の組織



② 研究の経過

平成27年度の研究			平成28年度の研究		
月日	回	主な研修内容	月日	回	主な内容内容
4. 3	①	研究主題、道徳の指導計画、授業について	4. 5	①	研究計画等の確認、研究授業者の提案、決定
4.20	②	研修の全体計画、道徳の授業について	4.15		道徳性検査及び校内アンケート実施
5.中旬		道徳教育指導者養成研修(中央研修)1名参加	4.19	②	特別講師富岡先生の模擬授業と講義
5.25	③	研究の組織、要請訪問指導案検討	4.25		保護者授業参観における道徳授業公開
	④	第1回要請訪問道徳授業研究会(3年)	5.13	③	道徳研究授業(3年)、富岡先生による指導
6.15	⑤	道徳教育指導者養成研修伝達、一人1授業計画作成	5.中旬		道徳教育指導者養成研修(中央研修)1名参加
6.22		先進校視察(高山村立高山中学校)	6. 8	④	要請訪問における道徳授業公開(各学年)
6.24	⑥	先進校視察の報告	6.13	⑤	中央研修報告、実践報告書の分担、各研究部会
6.25		アンケート調査実施	6.20	⑥	各研究部会より提案、要請訪問指導案作成
7.23		全体計画別業①(行事との関連表)作成	6.29		計画訪問における道徳授業公開(各学年)
		全体計画別業②(教科、特活等との関連表)作成	7.19		生徒、保護者、教師へのアンケート調査実施
8.10		道徳教育パワーアップセミナー(東京学芸大)2名参加	7.28	⑦	アンケート結果分析、各研究部会(実践報告書分担)
8.25	⑦	パワーアップセミナーの報告			研究発表会指導案の検討
8.31	⑧	道徳教育講演会(文科省教科調査官澤田浩一先生)	8.26	⑧	実践報告書原稿の集約
9. 7	⑨	道徳授業の進め方についての共通理解	9. 5	⑨	指導案の検討、掲示物の整備、各学年部会
10.13	⑩	研究授業指導案検討	9.12	⑩	要請訪問における道徳授業公開(各学年)(プレ大会)
10.19	⑪	2学年研究授業、講師による講話①	9~10月		実践報告書の校正
11.16	⑫	第2回要請訪問道徳授業研究会(1年)	10.17	⑪	模擬授業及び指導案の見直し
12. 7	⑬	研究授業指導案検討	11.14	⑫	発表準備
12.14	⑭	1学年研究授業、講師による講話②	11.24		道徳教育総合支援事業研究発表会
12.25		「道徳教育指導実践事例集」原稿の作成検討	12. 5	⑬	研究発表会の反省と授業研究会、実践報告書のまとめ
1.18	⑮	要請訪問指導案検討	1.23	⑭	取組の反省と今後の方向性
1.25	⑯	第3回要請訪問道徳授業研究会(2年)	2. 6	⑮	全体計画・年間指導計画の見直し
2. 4	⑰	全体計画・年間指導計画の見直し、研修集録作成	3. 6	⑯	研修のまとめと来年度の計画
3. 3	⑱	研修のまとめと来年度の計画			

(3) 研究の内容

① 基本的な考え方

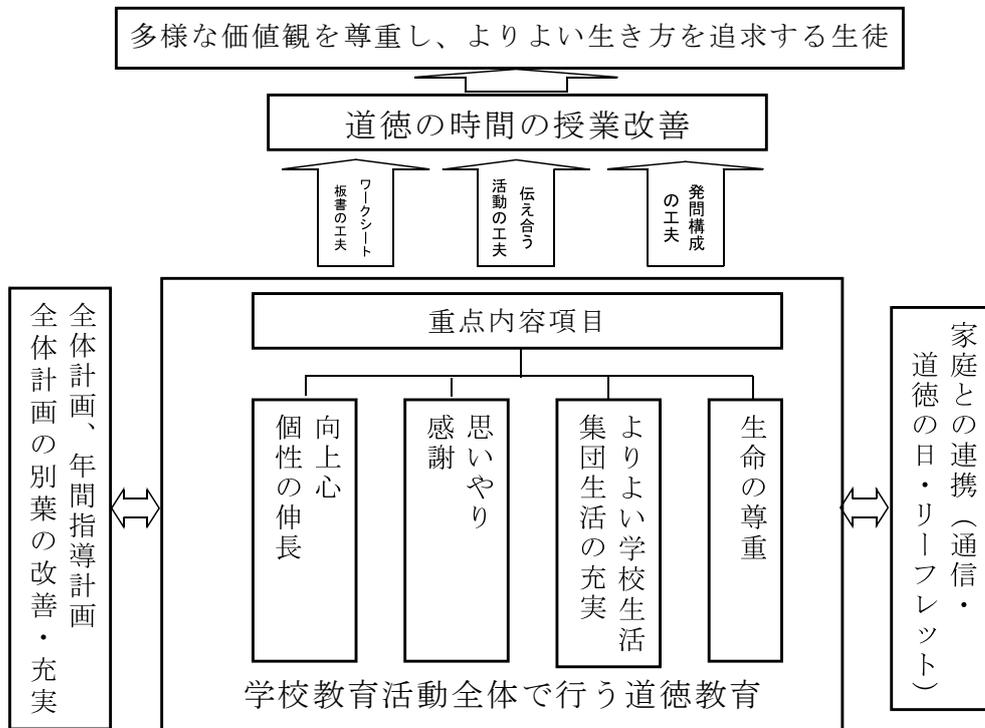
ア 「多様な価値観を尊重する」とは

ここでいう「価値観」とは、いわゆる道徳の内容項目における「価値」の違いを指すものではなく、一つの道徳的価値に対する捉え方や感じ方の違いを指すものである。具体的には、授業中他人の考えや意見を聞いて自分との違いを知り、そこで否定したり対立したりするのではなく、違いを認め受け入れることを意味している。

イ 「伝え合う」とは

本研究における「伝え合う」とは、課題に対する自分の考えをペアや小グループ、あるいは全体の場で「語る」のが基本であるが、それ以外にも、人の意見を聞いて頷いたり、カードに自分の立場を書いて示したりするようなことも含まれる。人の発言に対して必ず自分の考えをもつこと、そしてそれを積極的に人に伝えようとすることを意味している。

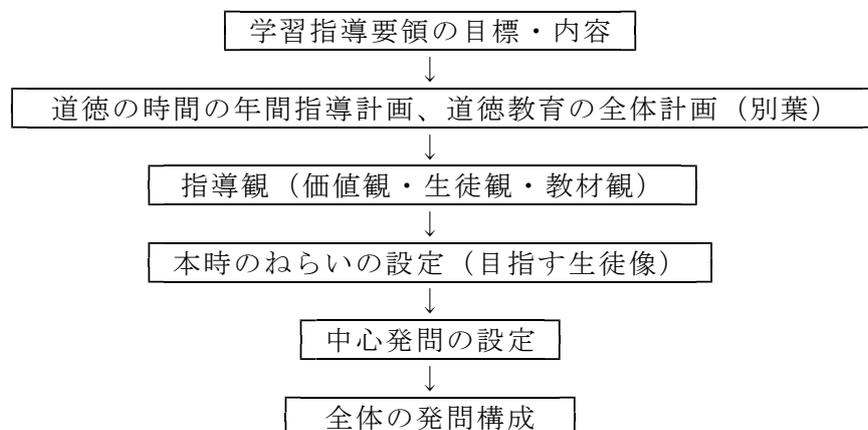
② 研究の全体構想図



③ 道徳の時間の指導の工夫

ア 授業構想の手順

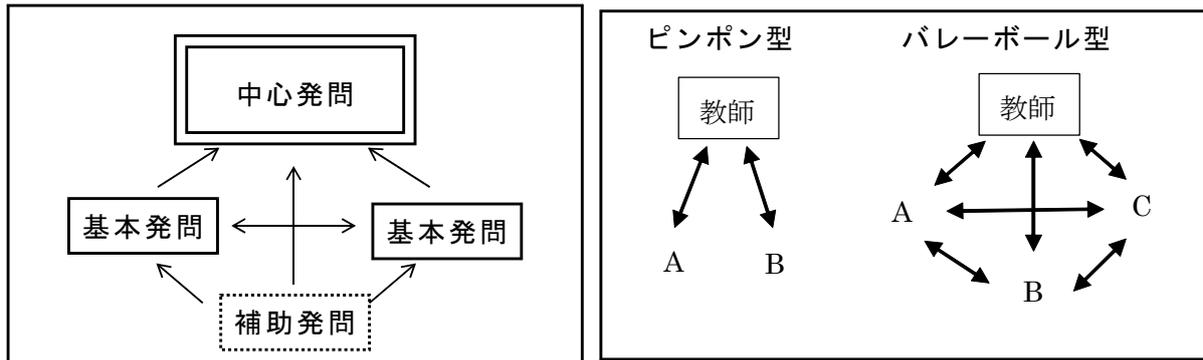
授業構想に当たっては、学習指導要領の目標・内容、年間指導計画を踏まえ、価値観、生徒観、教材観の3つの指導観を明らかにした上で、まず①「ねらい」を設定する。これは、授業の終末における目指す生徒の姿として考える。そして②「ねらい」に迫るための「中心発問」を考え、③その中心発問に導くための「発問構成」を決めていく。その際、それぞれの発問が独立して存在するのではなく、相互に関連し合っただけで必然的な流れになるように配慮した。



イ 発問構成の工夫

1時間の授業で発問の数は3つから4つ程度がよいとされている。中心発問に導く基本発問のほかに、生徒の活発な意見が出ない場合の補助発問を用意しておくことも大切である。

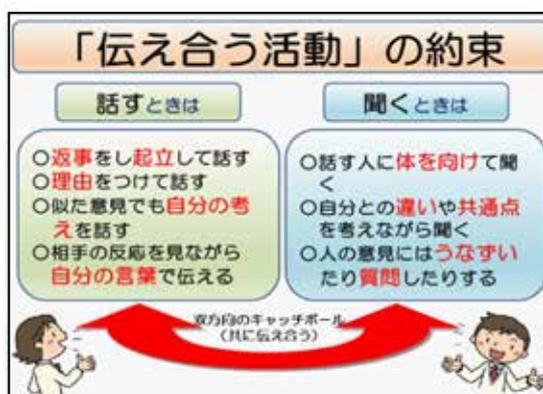
次に、とかく道徳の授業では教師の発問に対し、個々の生徒が答えていく一問一答のやりとりの繰り返りとなるいわゆる「ピンポン型」に陥りがちであるが、本校では1人の意見に対し、理由を聞いたり、他の人の意見を求めたりするいわゆる「バレーボール型」のやりとりになるよう心掛けている。教師が生徒の様々な意見を上手に引き出すコーディネーター役になると、そのやりとりの中で価値をより深めていくことが期待できる。ただ、そのためには、教師がそれなりのスキルを身に付ける必要があり、本校の研修においても大きな課題となっている。



ウ 「伝え合う活動」の工夫

「伝え合う活動」は、昨年7月に文部科学省から出された学習指導要領の一部改正の解説にある「考える道徳」「議論する道徳」を具現化するための手立てとして考えたものである。私たちが期待する「伝え合う活動」は、道徳の時間だけで身に付くものではなく、各教科における日常的な実践の積み重ねが必要であると考えた。そこでまず、意見交換のやりとりが活発に進むように、下図のような基本的な約束を決め、これを全ての教室に掲示して、道徳の時間以外の場面でも意識をして実践に取り組むようにした。

また、私たちが期待する「伝え合う活動」の具体的なイメージを生徒がもてるように、「伝え合う活動」のモデルを作成し、全校集会でビデオを見せながら説明をした。理想の姿としては、テーマについて各自が互いの顔を見合いながら、意見のやりとりができることを目指している。



また、「伝え合う活動」の形態は、ペア、小グループ、全体とし、それぞれを授業の流れや伝え合うテーマの内容に応じて使い分けるようにしている。

また、意見を言いやすくしたり、お互いの意見を理解するための補助として、付箋紙、短冊、カードを使うなどの工夫をしている。

エ 道徳ファイルの活用

30穴のリングファイルにクリアホルダーを綴じて、道徳の授業で使った教材やワークシートを入れている。また、行事などで書いた感想等は、ルーズリーフに書いて、関連する価値のところに挟み、道徳の授業で学んだ価値を振り返ったり、心情の変容などに気付けるようにした。このようにポートフォリオとして残しておくことで、教師も個々の生徒の評価を行うときの資料としても活用することができると思う。

④ 家庭との連携

本校では、家庭との連携を図るため、毎月19日を「道徳の日」と定めた。月ごとに設定したテーマに関する資料を「私たちの道徳」から選び、生徒が自分の考えを書いて家庭に持ち帰り、親子で話し合ってもらったこととした。あわせて、この日に道徳通信「Myハート通信」を発行し、学校での学習内容を紹介するとともに、家庭での協力を依頼したり、寄せられた保護者のコメントなどを紹介したりしている。

5 授業実践事例

(1) 「道徳的心情を育てる伝え合う活動の工夫」(第3学年)

① 生徒の実態

相手のことを思いやり、相手の立場に立って考えることができる生徒がほとんどである。しかし、日々の関わりの中で思いやりの感じられない言動を見聞きする場面がある。また、周囲の様子から、気が付いても思いやりの行動に起こせないことが多い。周囲の状況を理解し、相手の心を察し、行動しようとする意欲を育てたい。

② 授業者の思い

教材を使って、若い夫婦の注文を受けた後のキャストの言動とその言動を起こしたときの心情を考えることを通して、相手のことを考えて行動しようとする道徳的心情を育てたい。

③ 指導のポイント

- 展開の、「ことばを詰まらせたキャストがどんなことを考えていたのか」と問う場面では、ワークシートのハートの中に複数の思いを、大きさを考慮して書き込み、夫婦にお子様ランチを出してあげたい思いとマニュアルを守らなければという思いがあることをおさえる。
- 中心発問では、まずキャストのすごいところ、よいところを取り上げ、その理由やキャストの心情を個人で考えさせる。その後、4人グループで伝え合う活動を行わせる。聞く生徒は、発表内容と同じ意見や納得をした時に「イイネ!」と言いながらグッドポーズをする。その後、どの部分がイイネと思ったのか、あるいはなぜその部分をイイネと思ったのかを伝え合っているように促す。
- 全体でイイネと思ったところを伝え合い、多様な価値観にふれた後、言動以外のキャストのすごいところ、よいところを個人で考えることで、キャストが相手の心を察し、相手の気持ちを考えて行動していたことに気付けるようにしていく。

(2) 学習指導案

① 主題名 「相手の心を察する」(B:思いやり、感謝)

② ねらい 若い夫婦の注文を受けた後のキャストの言動とその心情を考えることを通して、相手の気持ちを考えて行動しようとする道徳的心情を高める。

③ 教材名 「あるレストランのできごと」(出典:日本文教出版)

④ 教材の概要

東京ディズニーランドの人気レストランのできごとである。若い夫婦からお子様ランチの注文を受けてキャストは困惑するが、事情を聞くと亡くなった娘の誕生日にお子様ランチを頼みたいとのことだった。マニュアルには9歳未満の子ども以外には、お子様ランチが出せないことになっている。キャストは悩んだ末に、笑顔と気遣いで夫婦にお子様ランチを出してもてなす。このキャストの行為はマニユア

ル違反であるが、お客様の気持ちを察した接客は会社から讃えられ、夫婦からも感謝の手紙が届いた。

⑤ 展開の概要

過程	生徒の学習活動（・）と 主な発問（○基本 ◎中心発問）	予想される生徒の反応 （期待される反応は <u>~~~~</u> ）	時間	支援及び留意点
導入	・今日の授業は東京ディズニーランドのあるレストランについての話であることを知る。		5分	・生徒にとって関心の高い話題にすることで、学習への意欲を高められるようにする。
展開	・教材1の範読を聞く ○ことばを詰まらせたとき、キャストはどんなことを考えているのだろう。 ・ワークシートに記入する。(個人) ・近くの席の人と伝え合う。 ・自分の考えを板書し発表する。(全体) ・キャストがお子様ランチを夫婦に出したことを知る ・教材2の範読を聞く ・このキャストのことをどう思うか、発表する。	・どうしよう。困った。かわいそう。 ・ <u>マニュアルを守らなきゃ</u> ・ <u>お子様ランチを出してあげたい</u> ・ <u>どうにかしてあげたい</u> ・キャストはすごい。 ・キャストはいい人だ。すてきな人だ。	20分	・キャストの悩む気持ちを理解しやすく、複数の思いを、それぞれの大きさも考慮しながら記入できるワークシートを用いる。(人間理解) ・価値理解へ向けての方向付けを行う。 ・生徒の反応をもとに、次の中心発問につなげられるようにする。
閉	〈伝え合う活動〉 ◎キャストの「すごい」「いいね」と思ったところはどこですか？理由も書きましょう。 ・ワークシートに記入する。(個人) ・グループで話し合う。(グループ) ・全体で発表する。(全体)	「勇気を出して二人に聞いた」 →・聞きづらいことなのに ・相手の様子を見て、何か事情があると感じた。 「いつもの笑顔で声を」 →・相手が気を遣わないように 「大人四人が座れるテーブル」 →・三人のゲストという思い	20分	・キャストの言動の中でイイネと思った部分を取り上げ、その理由、気持ちを考えさせる。(価値理解) ・4人グループで伝え合う活動を行わせる。自分の考えを伝えたり、他者の意見に対して相づちや賞賛、質問をしたりさせる。(他者理解)
終末	・本時の感想をまとめる	・ <u>もっと相手の気持ちを察して行動していきたいと思う</u> ・ <u>相手のことを本気で考える。思いやりのある人間になっていきたい</u>	5分	・本時の感想を、自己の振り返り、今後の生活と絡めて考えさせる。(自己理解)

(3) 授業記録（中心発問を中心に抜粋 T：教師 S：生徒）

T：キャストの「いい人だなあ」と思うところは、どんなところですか。ワークシートの枠の中に書き出してください。理由も書いてください。

S：(約8分間記入)

T：4人グループになって、キャストのいいところを発表してください。同じ意見だなど思ったり、なるほどそういう意見もあったかと思ったら、グッドポーズをして相手に「イイネ！」と伝えてください。

S1：マニュアル違反だとわかっていながら、「お子様ランチを出した」のはすごいと思うよ。自分のことよりもお客様のことを考えているよね。



S2：そうだよね。この意見は「イイネ！」だね。私はそれも大事だと思うけど、子様ランチを出す前に大人4人がけのテーブルに移動して、イスを子供用に取り替えたことも「イイネ！」と思うよ。

S3：どうしてそう思ったの？

S2：夫婦の願いに答えるだけじゃなくて、亡くなった子どものことも夫婦の気持ちも考えて、子どもがそこにいるようにテーブルやイスを取り替えてくれたんじゃないかなと思ったんだ。

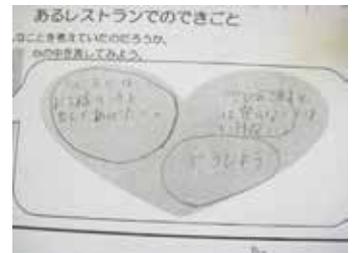
S3：なるほどね。そのキャストの行動も「イイネ！」だね。

S4：僕は「いつもの笑顔で」というところを「イイネ！」と思った。普通と同じように接してくれると安心すると思うんだよね。



(4) 考察

「キャストの気持ちをハートの中に、気持ちの大きさも含めて表す」や「『イイネ!』と伝える」は、「心の可視化」として効果的である。教師の話す時間を減らし、生徒が考えたり伝え合ったりする時間をもっと確保したい。「お子様ランチを出す」というキャストの行動の根底にどんな心情があったのかを深く掘り下げていけるとよい。できるだけ生徒から出た複数の価値観は取り上げて、それらを踏まえて生徒自身が総合的に判断できるようにすることが大切である。また、指導者として「期待される生徒の反応」を指導案の中にたくさん書けるとよい。



6 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

- ・ 研究授業において、指導観を中心に指導案の統一を図り、全職員の共通理解のもと、道徳の授業を行ったことで、教師の授業構想力、伝え合う活動の工夫等の質的な向上が見られた。その結果、生徒が道徳の授業に主体的、協働的に取り組むようになった。
- ・ 2年間を通じて特別講師を招いての基礎研修と授業研究会の積み重ねにより、教師に道徳授業における基本的な考え方や手法が身に付き、道徳の授業に自信をもって向き合うことができるようになった。また、指導主事による要請訪問を複数回行い、国や県の動向に沿った指導方法の研修が充実し、授業改善に結びついた。
- ・ 「伝え合う活動」の約束を簡潔にまとめた掲示物を作成し、全教室に掲示して、「伝え合う活動」を道徳の時間だけでなく、教科等の指導においても取り入れるようにした。その結果、生徒の発言への抵抗感が減り、自分の思いを少しずつ他人に伝えられる場面が増えてきた。

(2) 今後の課題

- ・ 生徒はペアや小グループでの「伝え合う活動」に慣れてきたが、この活動を通して道徳的価値の自覚をさらに深めていくための指導法について、さらなる研究が必要である。また、学級全体での「伝え合う活動」の場面において、生徒の考えをさらに引き出し深めていくことや、生徒同士による「伝え合う活動」となるために、教師のコーディネーターとしての技術を一層磨いていく必要がある。
- ・ 道徳の授業と学校全体における教育活動との関連付けを図ってきたが、今後は教科や行事等における道徳的価値の自覚を一層深めるために、道徳ファイルのより効果的な活用法について研究を深めていく必要がある。

7 参照できるホームページ

<http://www.nc.t-minami-jhs.gsn.ed.jp/> (富岡市立南中学校)